

氏名(本籍)	小 ^こ 松 ^{まつ} 建 ^{たけ} 男 ^お (東京都)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第2341号
学位授与年月日	平成20年2月29日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	中国近世小説の伝承と形成

主査	筑波大学教授	博士(文学)	松本肇
副査	筑波大学教授	博士(文学)	芳賀紀雄
副査	筑波大学准教授	博士(文学)	谷口孝介
副査	筑波大学教授	文学博士	堀池信夫
副査	筑波大学教授	博士(文学)	丸山宏

論文の内容の要旨

本論文は、中国近世における小説のテキストの分析を通して、小説の本来の姿を追究したものである。本論文の構成は、以下の通りである。

序

第一章 「小説」が書物となるまで

第二章 文言小説の伝承

第一節 『侯鯖録』所収「鶯鶯伝」の本文について／第二節 『類説』所収「鶯鶯伝」本文について／第三節 明代の「鶯鶯伝」本文

第三章 文言小説集における改作と編集

第一節 『情史』と馮夢龍の他の作品集／第二節 『情史』と先行する作品集／第三節 『情史』と『艶異編』

第四章 口語短編小説の創作方法

第一節 「封陟」の改作／第二節 「負心」の重さ／第三節 「范猷児双鏡重円」の創作方法

第五章 口語長編小説の創作方法

第一節 嘉靖本以前の『三国志演義』の姿／第二節 『三国志演義』の生成／第三節 『三国志演義』における呼称の不統一／第四節 『三国志演義』と史書／第五節 陳宮と曹操

結

序は、本論文の目的と構成について説明している。

第一章は、小説の概念について論じたもので、「通俗」と「高尚」という区分が導入されて、語り物と読み物との力関係が逆転し、読み物のみが小説と呼ばれるようになった経緯を示した。

第二章は、文言小説「鶯鶯伝」の伝承の過程を明らかにする。第一節では、『稗海』本の『侯鯖録』に収められる「鶯鶯伝」の本文を検討し、「予」という一人称で物語が語られていた痕跡が窺われることを明らかにした。第二節では、宋代に編纂された『類説』所収の「鶯鶯伝」本文について検討し、『太平広記』に収められた本文よりも、『類説』、『侯鯖録』、『董解元西廂記』に収められた本文の方が、宋代においては優

勢であったことを明らかにした。第三節は、明代の「鶯鶯伝」本文についての分析で、小説集、通俗類書、戯曲の付録、という三種類の本文を、『太平広記』、『侯鯖録』、『類説』、『董解元西廂記』の本文と比較し、『太平広記』のみが他と異なる本文をもつことを明らかにした。

第三章は、馮夢龍が編集した『情史』に収められる作品を、先行する他の小説集と比較し、改作の実態を追究する。第一節では、『情史』と、馮夢龍が編集した『太平広記鈔』、『智囊』、『古今譚概』を比較し、馮夢龍は、既存のものを利用して必要のある箇所のみを書き換える編集方法を採用していることを明らかにした。第二節では、『情史』と、馮夢龍以外の人物が編集した小説集に共通する作品を取り上げて比較し、『情史』は、他人の評語を利用し、書き換えも行っていることを示した。第三節では、『情史』に収められた『剪灯新話』の作品について、『艶異編』、『才鬼記』などに収められている本文と比較対照し、『情史』は、『艶異編』の本文を利用している可能性が高いことを証明した。

第四章は、口語短編小説の創作方法を、その素材となった文言小説と比較しながら論じる。第一節は、『酔翁談録』所収の「封陟」についての分析で、『太平広記』、『酔翁談録』、『緑窓新話』の三種類の本文を比較し、『酔翁談録』のみに見られる増補に注目して、「封陟」の改作の実態を明らかにした。第二節では、『酔翁談録』と『最娯情』に収められた王魁の話と比較し、両者における王魁の人物像の差異を明らかにした。第三節では、『警世通言』所収の「范鰲児双鏡重円」を取り上げて原作と比較し、人物造形について、極端なほど道徳性にこだわる人物として作り直されていることを指摘した。

第五章は、長編の口語小説として『三国志演義』を取り上げ、失われた原本の姿を追究する。第一節では、『三国志演義』の最も古いテキストである嘉靖本と、次に古いテキストである『三国志演義史伝』とを比較し、嘉靖本以前の時代の『三国志演義』の段階では、注と本文の表記の形態が、今とは異なっていたことを証明した。第二節では、関羽と趙雲の呼称の不統一に注目し、『三国志演義』の古い層では、この二人が武勇の人であったのに対し、新しい層では理性的な人物として造形されていることを明らかにした。第三節では、呼称の不統一について、分析の対象を関羽、趙雲以外の人物に拡大し、不統一には、作者が利用した資料の呼称をそのまま受け入れ緩やかな統一で満足している場合と、転写の過程で意図的あるいは不注意に書き換えてしまった場合があることを明らかにした。第四節では、嘉靖本『三国志演義』第122則が、『資治通鑑綱目』に依拠し、足りない情報を『三国志』、『後漢書』の本文と注で補っていること、および、『三国志演義史伝』の方が原本に近く、嘉靖本は意図的な書き換えを行っていることを明らかにした。第五節では、曹操が呂伯奢を殺した話を取り上げ、陳宮という人物を同行者として登場させたことに最大の工夫が見られること、この話は、陳宮と曹操に関する一連の物語の発端として、重要な役割をもっていることを指摘した。

結は、全体の内容をまとめて、本論文の意義を説明している。

審査の結果の要旨

中国近世の小説は、発生から成立までの間に、長い時間が経過して、いろいろな人の手が加わっているために、本来の姿を明らかにすることが大変むずかしい。本論文の著者は、小説の本文における踏襲と書き換えの実態を精査し、古い層と新しい層を識別する、という方法を用いて、小説の本来の姿を復元しようとしている。これは、従来の小説研究にはない斬新な方法で、本論文の大きな特色である。

本論文には、小説の異文が多数集められているが、単に集められているだけではない。多くの異文を丁寧に比較し、根拠を示しながら、本来のテキストの姿について、明確な判断を下している。著者は、小説の複数のテキストを比較し、その不一致を丹念に調査している。そして、その結果を利用して、文献の残っていない時代の本文にさかのぼることが可能であることを示した。これは、著者の小説研究の大きな成果である。また、小説の書き換えには、作者が生きていた時代の価値基準に近づけるという一貫した傾向が見られるこ

とに注目し、創作方法から小説の成立年代の推定を行っている。

本論文は、『三国志演義』研究でも、めざましい成果を上げている。著者は、嘉靖本『三国志演義』と『三国志演義史伝』を比較し、嘉靖本は、誤字は少ないが、意図的な加工が行われた箇所が多いことを究明した。嘉靖本『三国志演義』は、説明文を嫌って本文から排除し、注に移したために、本文と注の関係に混乱が生じた。この混乱に注目し、さまざまな資料を比較しながら、正しいテキストを復元したのも、本論文の成果のひとつに数えられる。

また、著者は、嘉靖本『三国志演義』第122則の董昭の話について、「九錫」に列挙されている名目が、嘉靖本と『三国志演義史伝』で異なることに注目する。そして、両者の異同を丹念に分析し、その理由を解明する。著者によれば、『三国志演義史伝』が祖本の本文に手を加えなかったのに対し、嘉靖本は、『後漢書』をはじめとする資料に基づいて、本文に手を加え、しかも不用意な加工を行ったために、異同が生じたという。このようにして、複雑に入り組んだ本文をあざやかに解明していく方法は、著者の独壇場である。

今後の課題としては、演劇、戯曲、仏教説話などの研究を進めること、文学批評の研究成果を積極的に活用すること、小説の社会背景を視野に入れること、などが挙げられる。

以上のような課題が残されているとはいえ、本論文は、小説の本文の踏襲と書き換えを精査することによって、小説の本来の姿を復元するという、小説研究の新しい方法を切り開いた。本論文が、小説研究の前進に大きく寄与することは間違いない。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。